

南国土佐の思い出



日野病院名誉病院長 玉井 嗣彦

私は1981年3月、初代の高知医科大学（現高知大学）教授として高知に移り住み、1989年7月に母校鳥取大学医学部の存在する米子へ配置換の辞令を受けて、舞い戻ってきました。8年有余の土佐での生活は楽しい思い出ばかりで、去る2月には日野病院関係者の方々より祝宴の栄を賜りましたが、傘寿を迎えた今でも、折にふれて懐かしがっています。

山陰と違って、高知は1年中雪が降らないので、車が出せないのタイヤがどうのと悩むことはなく、その点では快適でした。最低気温は結構低いのですが、冬でも太陽サンサンなので日中は暖かかったです。特徴は桜の咲く3月下旬を過ぎるといきなり夏になることで、同伴した家内はいつも「春がない」とこぼしていました。

4月になると男性は半袖、女性はノースリーブになります。そして6月の荒梅雨、まさにバケツをひっくりかえしたように、夕方決まった時間に毎日雨が降りました。なにごとにも豪快でした。

地形はご存じ室戸、足摺と太平洋に突き出た岬があり、先端に立てばぐるり360度ぐらいが海。「さても地球は丸きかな！」の実感があります。そして、桂浜の龍馬像のごとく「この先はアメリカか！」と感慨に耽ることになりますが、この視界の広さと開けっ広げな土佐人気質とは大いに関係があると思われます。

土佐人は酒好き。とにかく宴会が多かったです。女性もよく働き経済力もあるので、夜遅くまで飲み歩いでいました。家内も最初は驚いていましたが、やがて夜の帳が降りるのを楽しみに待つようになりました。

結婚式、開院祝などもとても派手で、300人から400人の客は普通。いったん飲み始めると献杯、返杯でとめどがなく、人の話など聞きませんから、結婚式なども乾杯の前に両家や新郎新婦の御礼の挨拶まで済ませてしまうのには驚きました。仲人も終始落ちつかない状態です。

今は仲人をさせていただく機会もありませんが、米子へ帰ってからも、鳥取大学教授在任中の仲人役を仰せつかった時などに、お色直しの間などで、つい壇上から降りてビールを持ってうろうろしてしまい、失笑を買った記憶があります。

高知は実に楽しいところでした。今では年2回程度の大学関係行事への訪問のみになりましたが、また、ご縁があれば親交を一層深めてみたいと思います。



(カットは玉井嗣彦名誉病院長)